

# 香川県立保健医療大学リポジトリ

母性意識と文化的な背景：  
ネパール王国における乳幼児に対する関わり意識の  
構造

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kagawa-puhs.repo.nii.ac.jp/records/10">https://kagawa-puhs.repo.nii.ac.jp/records/10</a>

母性意識と文化的な背景  
—ネパール王国における乳幼児に対する関わり意識の構造—

松村 恵子  
(香川県立保健医療大学)

Motherhood Consciousness and a Cultural Background  
—Structure of Involvement Consciousness toward an Infant  
in the Kingdom of Nepal—

Keiko MATSUMURA  
*Kagawa Prefectural University of Health Sciences*

**Abstract**

The present study presumes that, in the structure of motherhood consciousness, the perception on maternity is related to defining the involvement consciousness toward an infant. The motherhood consciousness is considered to undergo changes under the influence of knowledge and experiences cultural backgrounds etc., which are institutionalized and classified according to types, based on the characteristics of attributes. The author aimed to analyze the actual situation on how the involvement consciousness toward an infant has been formed in the Kingdom of Nepal, and to elucidate its characteristics. As a result of investigation made by the questionnaires to 631 mothers living in the city of Katmandu and its vicinity, from whom the author was able to obtain the cooperation for the study, the descriptive statistics showed that “I have been left behind in the community”, “I am more interested in other things than an infant”, etc. were classified in the evaluation step of “It is true”, while “I wish that an infant can grow in good health”, “I feel happy, being together with an infant”, etc. were in the evaluation step of “It is totally different”. In the factor analysis, 5 factors were extracted, for which the author named “growth in humanity” (I), “infant supremacy” (II), “impatience in child bearing” (III), “refusal of child bearing” (IV) and “dissatisfaction with child bearing” (V). As the characteristics which were identified in the present study, the negative consciousness was clearly seen in the 27 items of the evaluation step used as a measurement tool for the involvement

consciousness toward an infant, but the descriptive power of positive consciousness was found to be significant in terms of the factor structure.

## 1. 緒言

自然に考えると、人は女性か男性で、この二つの性が交わり絆を深める連帯性や、人類の繁栄に繋がる生殖性などによって、新しい生命が誕生し啼泣しながらこの世に産まれるときは一人で、生を終えるときも一人である。この生涯において、とても大切なことは生きている間、誰かとの関係を築きながら存するという、生きるということは、人と人との繋がりをもつことによって生かされてくるのではないかと考える。

そして、女性と男性という二つの性の双方に、学習し生涯発達しながら愛を育む人間性があり、その内に「育てる性」があると考えられる。「子どもを育てる」という営みは、世界各国いずれにおいても共通といえる。しかしながら、人間の文化の多様性は際立っていることから、その国の文化に特有な子育てに関する意味づけや認知的概念枠組み、行動様式が存在する。そして、子育ては法や制度、医学的言説、それぞれの国の文化的伝統によって成り立っている。

世界有数の多民族社会として独自の文化的背景を持つネパール王国では、子育てにおける役割について、日本では三歳児神話といわれる「少なくとも子どもが小さいうちは母親は仕事を持たず家にいるのが望ましい」、「子どもが三歳になるまでは母親は育児に専念するべきだ」は、いずれも「反対」が約80%であったが、日本ではいずれも「賛成」が約80%を占めていた<sup>1</sup>。この実態分析からは、ネパール王国はヒンドゥー教の影響を強く受けた封建的父権社会であり、多種多様なカースト・グループという『縦糸』と、エスニック・グループという『横糸』が複雑に織りなす現象によって規定され意識化してきたのではないかと考えられる。

今回は、文化的背景から考えられる『複雑性』について焦点をあてる。アンソニー・ギデンズ<sup>2</sup>は、カースト制度は極めて複雑であり、また地域ごとにその構造は異なる。あまりにも異なるため、カーストは、実際には決してひとつの「システム」を組成せず、さまざまな信念や習わしが穏やかに結びついたものである。しかし、いくつかの原則を広く共有していると述べている。これまで、母性意識に関する実証的研究<sup>3</sup>では、特に「構造」を分析し説明することに重点をおいて取り組んできている。構造には固有の性格として「全体性」がある。この全体性を発見する手がかりとなるのは、どのような構造が実在しているか、或いは、現象のなかに隠れているかをみつけていくことから始まる。そして、この全体性を満たすためには、構造を構成する諸要素が単なる集合体として在るのではなく、すべての要素がそれぞれに関係性を持っていること、連動性があることが重要となる。

## 2. 研究の枠組み

本研究では、まず、図1に示したように母性概念は「子育ては女性に備わっている特有の性質によって行われる」、あるいは、「子育ては人間として誰もが学習して行う」と認知するかであり、母

母性意識は「母性という用語をどのように認知しているか」と、「乳幼児に対してどのような関わりの意識を持っているか」という二つの要素によって構成され、母性に関する認知は乳幼児に対する関わり意識を規定する関係にあると考えている。今回は、母性意識に繋がる「乳幼児に対する関わりの意識」を構成する変数間の関係を分析し『意識の特徴』について検討する。

次に、『属性の特徴』は『認知の特徴』と『意識の特徴』において相互関係にあると考え、図2に示したように、『属性の特徴』は一つのシステムとみなし、その内に民族や宗教などの文化的背景・性別・年齢・家庭環境・兄弟姉妹・学習歴など幾つかの要素をもつサブシステムが存在すると考える。今回は、民族や宗教などの文化的背景という一つの要素に焦点を当てる。これは、ネパール王国の人々では、サブシステムを構成する文化的背景という要素が複雑多岐にわたっていると推測されるからである。

複雑性には要素の種類の数に影響している。要素とは「もの」ではなく「こと」である。つまり人々の生活における様々なこと「現象」として、要素と要素の関係を認識するいくつかの『サブシステム』が形成され、『属性の特徴』を構成する『システム』が成立すると考えている。ここでのシステムとは、構成要素の集合として要素間の関係からなる総体として認識されると考える。

### 3. 目的

ネパール王国は、多民族国家でありヒンドゥー教のカースト制度を持っている。カーストという単語は、もとはポルトガル語で「血統」を表す語「カスタ (casta)」でラテン語の「カストゥース (castus)」「混ざってはならないもの・純血」に起源がある。したがって、カースト間の移動は認められていない。結婚も同じカーストで行われ、カーストは親から子へと受け継がれる。100以上のカーストと民族集団があり、人々は複雑に入り込んで生活し文化も多様である。子育てに関する経験や認知も大きく影響を受けていると考えられる。今回は、ネパール王国における乳幼児に対する関わりの意識の特徴について明らかにする。属性の特徴との関係では文化的背景における複雑性について考える。

### 4. 方法

- 1) 研究デザインは、乳幼児に対する関わり意識を構成する測定用具は28項目の変数で構成しており、この変数間を調べることによって、ネパール王国の人々の状況に存在するさまざまな関係性を分析する記述相関関係の研究デザインとした。
- 2) 対象：カトマンズ市内とその周辺（パタン地区）の住民で、調査協力が得られた631名とした。
- 3) 調査期間：2006年12月に調査した。
- 4) 測定用具：乳幼児に対する関わり意識について作成した28項目で、この項目は、①乳幼児こそ生きがい、乳幼児のこと、他のこと、自分のこと、関心がどこにあるか等の7項目、②乳幼児と関わることによって自分も成長する等の7項目、③自分の思い通りにできないなどの育児不満、

育児をしていると世間から取り残される焦燥等の7項目、④乳幼児と関わることの肯定と否定の7項目という4つの下位尺度から構成している。評定は①全く違う、②違う、③どちらでもない、④そうである、⑤全くそうであるの5段階とした。

- 4) 収集：2006年時に、園田学園女子大学の湯舟貞子教授とネパール医科大学の Shiba Kumar Rai 教授の支援を受け、現地の住民の通訳による質問紙調査法とした。
- 5) 倫理的配慮：研究に対する同意の意思を確認した。調査票は無記名で個人の特定を回避し、データは統計的処理とし研究目的のために活用とした。
- 6) 分析：IBM SPSS Statistics18を用いた主要変数の記述統計により肯定の度合いを明らかにする。因子分析（主成分分析、プロマックス法）により、変数がどのように平面的に散らばっているか、或いは、集まっているかについて因子構造を明らかにする。クラスタ分析（凝集型の階層的クラスタ法、重心法、Pearson の相関）により、変数が立体的な階層を持っているかどうかについて階層構造を明らかにする。さらに、因子構造と階層構造を比較分析することとした。

## 5. 結果

- 1) 回収：有効回答は631部であった。
- 2) 対象者の性別と年齢：男性が271名（43%）、女性が359名（57%）であった。  
平均年齢は38歳で11歳から88歳の幅があり標準偏差は18.38であった。
- 3) 対象の背景：呼称、民族、カーストの視点から6つのカテゴリーに分類し、その詳細は本誌『比較文化研究 No.85, 2009, p.85』で報告した<sup>3</sup>。最も多いのはAグループの341名、続いて、Cグループの177名であった。なお、Aグループの341名は上位カーストで、男性154名、女性187名であった。B、C、D、E、Fグループは下位カーストで、男性120名、女性170名であった。

### 4) 変数の記述統計

測定用具は28項目で構成しており、日本での先行研究では総てを用いることができていたが、ネパール王国では、「乳幼児と関わっているときが自分らしい」という項目は、現地住民の通訳者から採用されなかった。したがって、27項目について分析した。評定段階が〈そうである〉平均値3.5以上は、「世間から取り残される (3.59±1.067)」、「乳幼児よりも他のことに関心がある (3.58±0.877)」の二項目であった。その反面、〈違う〉平均値2.5以下は、「乳幼児は元気に育てて欲しい (1.25±0.615)」、「乳幼児と一緒に楽しい (1.58±0.759)」、「乳幼児こそ生きがい (1.65±0.899)」、「いとおしく守ってあげたい (1.66±0.972)」、「乳幼児に一番の関心がある (1.80±0.909)」等の14項目であった。

### 5) 因子分析ならびに信頼性分析と成分相関

因子分析では、相関行列、成分行列、パターン行列、構造行列、成分相関行列より因子構造を解釈した。固有値1.00以上は8因子抽出され累積寄与率は56.6%であった。固有値は、5.04-2.47-1.89-1.48-1.26-1.07-1.05-1.00と減少しており、因子負荷量0.321以上、累積寄与率45.0%を基準に解釈し5因子を抽出した。信頼性分析の結果、27項目における Cronbach の  $\alpha$

係数は0.806であり信頼性は確保できていた。

因子構造は表1に示した。因子Ⅰは、「7. 自分も成長する」「5. 自分の表情を豊かにする」「3. 気持ちが安定する」「12. 乳幼児の為なら何でもできる」「4. 自分を優しい人間にする」等8項目で《人間性成長》とした。因子Ⅱは、「28. 乳幼児は元気に育ってほしい」「20. 乳幼児に一番の関心がある」「21. 乳幼児と一緒にでは我慢することが多い」「27. 乳幼児こそ生きがい」等6項目で《乳幼児至上》とした。因子Ⅲは、「19. 視野が狭くなる」「15. 活動が制限されてつまらない」「16. 乳幼児と一緒にでは気分転換できない」「9. イライラする」等5項目で《育児焦燥》とした。因子Ⅳは、「23. 世間から取り残される」「22. オムツ交換など汚い世話はしたくない」「24. 乳幼児よりも自分のことに関心がある」「11. 自分は乳幼児と関わることに適していない」の4項目で《育児否定》とした。因子Ⅴは、「1. 楽しみや趣味を持ってない」「6. 自分の思い通りにできない」「13. 乳幼児よりも他のことに関心がある」の3項目で《育児不満》とした。なお、「14. よく泣くので関わりたくない」は因子負荷量0.612、共通性0.390でいずれの因子にも属していなかった。

各因子の成分相関では、因子Ⅰ《人間性成長》と因子Ⅱ《乳幼児至上》で0.461、因子Ⅰ《人間性成長》と因子Ⅳ《育児否定》で0.314の相関が認められた。

## 6) クラスタ分析

クラスタ分析では、近接行列から有意確率を導き出し4つのクラスタを見出した。階層構造は図3に示した。類似度が0.390以上は、クラスタⅠとⅡで認められた。クラスタⅠでは「25. 乳幼児と一緒に楽しい」と「26. 乳幼児こそ生きがい」で〈 $r=0.541$ 〉、「20. 乳幼児に一番の関心がある」と「21. 乳幼児と一緒にでは我慢することが多い」で〈 $r=0.433$ 〉、「25. 乳幼児と一緒に楽しい」と「27. 乳幼児は元気に育ってほしい」で〈 $r=0.419$ 〉、「26. 乳幼児こそ生きがい」と「27. 乳幼児は元気に育ってほしい」で〈 $r=0.415$ 〉、「17. いとおしく守ってあげたい」と「27. 乳幼児は元気に育ってほしい」〈 $r=0.395$ 〉であった。つづいて、クラスタⅡでは「3. 気持ちが安定する」と「5. 自分の表情を豊かにする」で〈 $r=0.409$ 〉、「8. かわいいので抱きしめたい」と「12. 乳幼児の為なら何でもできる」で〈 $r=0.396$ 〉、「5. 自分の表情を豊かにする」と「7. 自分も成長する」で〈 $r=0.390$ 〉であった。また、クラスタⅢでは、類似度が高いのは「1. 楽しみや趣味を持ってない」と「6. 自分の思い通りにできない」で〈 $r=0.327$ 〉であった。クラスタⅣでは「9. イライラする」と「11. 自分は乳幼児と関わることに適していない」で〈 $r=0.347$ 〉であった。

## 6. 分析

意識の構造について分析の結果、第一に、因子ⅠとクラスタⅡを構成する6項目全ては一致しており、同じ次元で共存していることが推測される。第二に、因子ⅡとクラスタⅠにおいて8項目は一致しているが、クラスタⅡでは「24. 乳幼児よりも自分のことに関心がある」の1項目が階層構造に取り込まれていることが浮き彫りになっている。第三に、因子負荷量0.612、共通性0.390の値

であるにもかかわらず、いずれの因子にも属していなかった「14. よく泣くので関わりたくない」は、クラスタⅢに属しているが、近接行列からみた類似度は、「6. 自分の思い通りにできない」で  $\langle r=0.217 \rangle$ 、「16. 乳幼児と一緒に気分転換できない」で  $\langle r=0.204 \rangle$  であった。これらのことから、平面的な集まりとしての因子構造では、《育児焦燥》の構造にあるが、「9. イライラする」ということではない意識であることが推測される。また、《育児不満》の因子構造では、「13. 乳幼児よりも他のことに関心がある」が負の因子負荷量で因子Ⅳになっていることから、階層構造では共存していた変数ではあるが、因子構造ではひとつの意識として纏まった集まりはないことが推測される。

## 7. 考察

### 1) 意識構造の特徴

乳幼児に対する関わり意識の構造について明らかになった特徴から考えられることは、第一に、因子分析で説明力の大きい因子Ⅰは《人間性成長》、因子Ⅱは《乳幼児至上》と肯定的な因子が見出されたことである。これは、先行研究<sup>4</sup>の調査対象では、子育て中の母と助産師と一致しているが、変数の肯定の度合いはいずれも全く異なっていた。たとえば《人間性成長》における「5. 自分の表情を豊かにする」では、乳幼児を子育て中の母と助産師は〈そうである〉、今回は〈違う〉の評定段階であった。《乳幼児至上》における「25. 乳幼児と一緒に楽しい」では、乳幼児を子育て中の母と助産師は〈そうである〉、今回は〈違う〉の評定段階であった。また、《人間性成長》や《乳幼児至上》は、先行研究<sup>5</sup>の調査対象、一般大学男女学生、看護女子学生、乳幼児を子育て中の父、乳幼児の子育てを終えた母と父では、説明力の小さい因子ⅢやⅣで見出されているが属している変数の肯定の度合いは、いずれも〈そうである〉の評定段階であった。

この特徴には、まず前提として考えられることがある。それは、因子分析<sup>6</sup>は変数間の関係を成り立たせている因子を見つけ出し、変数と因子の関係で、変数間の関係を説明しようとする。変数間に関係が生じるのは、個々の変数が何らかの程度で共通因子の影響を受けているため、あるいは共通因子を含んでいるためだと考える。因子は、実際に測定することのできない潜在的な変数であるから、測定された変数間の相関関係から出発して、相関関係の背後にある未知の因子を探っていく分析方法である。

したがって、変数の肯定度合いが共通する因子構造が見出されることになり、肯定度合いが低くても説明力は大きくなったと考えられる。

第二に、クラスタ分析を行い、因子構造と階層構造を比較分析した結果で明らかになったことは、「6. 自分の思い通りにできない」、「9. イライラする」、「13. 乳幼児よりも他のことに関心がある」、「14. よく泣くので関わりたくない」、「24. 乳幼児よりも自分のことに関心がある」の5つにおいて異なった構造を形成する変数が見出されたことである。これは、階層的な分類構造を明らかにしたクラスタ分析によって、変数の持つ特徴に対して変数間の類似性や非類似性をもとに、いくつかの分類ができ、纏まったり離れたりしたと考えられる。

このような現象をどのように解釈したらよいのであろうか。どのような考え方が、今回の調査対象者の背後にある未知の因子、つまり、意識を規定する属性の特徴であり、いわゆる母性意識の文化的な背景であろうか。筆者は、ネパール王国の調査を分析しながら日本の社会をみつめつつ、明らかになった実態から生じたこの研究的疑問を問う糸口を5年間、探し続けてきたが、今ひとつ、その問い方をみつけたような気がする。それは、子どもを育てる意味について、「いきがいである、血がつながる分身を次世代に残していきたい、病気になったときや老後の世話をしてほしい」など一見、個人的なことのみが顕在化しているように見える。しかしながら、その水面下を探っていくと、やはり人と人は繋がって生きているという事実が見えてきたように思う。

乳幼児に対する関わり意識は、自らの個性だけによって生成されるのではなく、その人が属する地域社会など、集団の個性によっても影響を受けて生成されるということは、人類誕生の起源から今日まで連続と繋がってきた現象ではないかと考える。

哲学的論考ではあるが、『ゲーテの世界観の認識論要綱』によると、人間は自分自身にだけ属しているわけではなく、社会にも属している。人間の内に生きているのはその個性だけではなく、同時に彼の属する民族の個性も生きている。彼の成し遂げることは、彼の力によるのと同様に彼の民族の力からも発生しているのである。彼は自分の使命を果たすことによって、同時に民族共同体の使命の一部をも果たしているのである<sup>7</sup>。人間は「子どもを育てる」という営みにおいて、その意義や意味を個人的なものに固着してしまうと、自然な営みに逆らってしまうのではないだろうか。

そして、その生きる姿勢が社会のひずみとなり、例えば、日本では子育ての過程における『乳幼児虐待の増加』などの現象をつくりだしているのではないだろうか。つまり、「人間は自分自身にだけ属しているわけではなく社会にも属している」という意識と行動について、今日、特にひとり一人が改めて問う社会づくりが重要と考える。

## 2) 属性の特徴との関係における複雑性

意識と属性の関係における複雑性について、第一に、前述の『ゲーテの世界観の認識論要綱』<sup>8</sup>において引用したように、同時に民族共同体の使命の一部をも果たしているのである。ネパール王国のようにヒンドゥー教の影響を受けた封建的権威社会では、カースト制度のもと、カースト・グループとエスニック・グループが複雑に折り重なった民族共同体をつくっている。そして、この共同体では、基層的な社会構造の大半がカースト制度に基づく仕事の内容規定や、血族を大切にする人間関係が生じている。人々は、個人と共同体のつながりを強くもって生活していると考えられる。

結城<sup>9</sup>によると、ネパールの社会構造の大枠を理解するためには、「ジャート」という用語が重要である。ジャートはインドの「ジャーティ」からきた用語である。ジャーティはカースト制度の四つのヴァルナ内部にある「生まれを同じくするもの」の集団で、内婚や世襲職業、共食規制などの社会規範をもっている。しかし、ジャートはジャーティよりも広い意味で使われる。同じ内容を示すときもあるが、ヴァルナを意味するときもあれば、更に民族や国籍にも使われることもある。例えば、タマン族のジャートは「タマン」になる。日本ではジャートは「ジャパニ」（日本人）となるが、ネパールではジャートはジャーティを単に意味するだけでなく、民族を含めた帰属やアイ

デンティティを示す枠組みを与えるものであり、ここに社会構造の複雑さの一つが見られる。また、上位カーストは、最下位に位置する職業カーストなしには生活することができない。農具を製作したり、服を仕立てるような穢れた仕事は、ブラーマンやチェトリにはできない。このような職業カーストは、ネパールでは「パニ・ナチャルネ」（水を受け取ってもらえない人々）と呼ばれている。パニは水のことで、穢れを浄化する力のある水でさえも受け取ってもらえないという、ある意味の「不可触民」となっていると記している（p.38）。

また、結城<sup>10</sup> は、調査のために最下層の仕立て屋のカーストとしばらく一緒に住んだが、彼らといる限りは非常に快適である。彼らはヒンズー教的規範に厳格にとらわれることなく生きていけるからである。例えば、最上位のカーストのブラーマンは、酒を飲んではいけないうし肉を食べることもできない。彼らは米のほかにイモとかマメ、乳製品を食べている。ところが、一番カーストの下の人には肉を食べようが酒を飲もうが許される。彼らは仲間で生活を助け合っていて、日常的にカースト制度の矛盾を議論しているわけではない。今、多くの開発実践者が「下位カーストの人たちのエンパワーメント」のようなことを言っているが、下位カーストの人たちの本音は「そんなことはブラーマンたちにやらせておけばいい。彼らは沐浴したりお経を読んだり面倒くさいことをやっていて、俺たちは肉を食べて酒を飲んでいればいい」というところにあるような気がする」と記している（p.44）。

菅野<sup>11</sup> は、ネパールの家父長制社会の中で女性は家の中、共同体で従属的な立場におかれている。女性の労働が家計への貢献になり、家庭生活に不可欠であっても、それは男性中心の家族制度の中ではイエを守っていく為に〔当然〕女のやるべき仕事、役割と見なされ、価値を付随されることはない」と記している。ネパールの15歳から19歳までの女子の4割以上は既婚者で、婚家での嫁の仕事があるといわれている。

また、ネパールのような最貧国のカテゴリーに入る開発途上国では、貧困家庭の多くは少数民族や、低カーストのグループであり現金収入は極端に少ない。特に山岳地帯で暮らす人々は、女性も男性も、大人も子どもも、厳しい自然環境と共存しながら自給自足にちかき生活を送っていると記している。

第二に、前述のアンソニー・ギデンズ<sup>12</sup> は、カースト制度は極めて複雑であり、また地域ごとにその構造は異なる。ひとつの「システム」を組成せず、しかし、いくつかの原則を広く共有している。カースト制度は、再生に対するヒンドゥー教の信条と切り離せない関係にある。みずからのカーストの儀礼や義務を遵守することを怠る人間は、次に生まれ変わったとき、もっと下の位置で再生すると信じられていると記している。このことから、ひとつの「システム」では解釈し説明できない状況にあることが推測されるが、研究枠組みで示した関係図について、さらに検討が必要である。

ネパール王国における乳幼児に対する関わり意識の構造について、構造と要素の関係では、要素の種類が複数であるならば、変数としての要素が一つでも、その構造は複雑になる。その反面、要素の数が複数でも各要素の種類が一つしかない、その構造は複雑ではなくなるが、ネパール王国では要素の種類が複数で、しかもそれは原則的な規定があることによって、各要素間の連動が生成され、意識構造において複雑性が生じているのではないかと考える。

例えば、属性の特徴は、まず、年齢や性別、職業、文化的背景という要素となり、さらに文化的

背景の内に、また細分化された性別との関係を含む要素、カースト制度が包含されている職業との関係を含む要素というように、入り込み折り重なっているのではないかと考える。このことによって、人々が自らの人生を生きることは、所属するカースト全体がいきることに繋がっていると考えられる。そして、結果で述べたように、ネパール王国では「乳幼児と関わっているときに自分らしい」という調査項目は、現地住民の通訳者から採用されなかったことと合致している。また、分析の結果、変数の肯定度が低い因子の集まりが最も説明力の大きい因子構造となり、階層構造では共存する変数も因子構造では離れていることも大きく関係していると考ええる。

## 8. 結語

よく考えてみると、人は、同じものを見ていても異なった見方をしていたり、感じ方や考え方も、そして、国の実情や文化的背景などによって、物事に対する価値観も日々の生活も生き方も様々である。本稿では、母性意識を規定する属性の特徴において、要素の一つである文化的背景が大きく影響することを明らかにした。

しかしながら、どのような現象のなかにあっても、人は生命について考え、いのちを育む術を『問う』ことが大切である。そして、人間は創造されたものから創造へと、偶然性から必然性へと、現実のどの出来事とも対峙し、自然の内に隠されているように思われる未知数の可能性を探究することも重要と考える。課題は、どのように問うこと、知ること、為すこと。他者と共に生きること、いのちを育む人間として生きることを学ぶかである。顕在化していない水面下の可能性を発見できるかである。

もしかしたら、今日の日本で増加の『乳幼児虐待』は、「子どもを育てる」という営みにおいて、人間は誰人も社会に属し繋がりがながら将来の世界を担う子どもを育てている、という自然なこと、自らの内にある人間としての創造的な可能性について、幸せな社会づくりの術について考え、深く、学んでいないからかもしれない。

子育てが、女性・母親としての役割、男性・父親の役割であるなどの性別役割や親役割という考え方や、個人の所有とするわが子意識にとどまるのではなく、社会生活をしている人間の在り方として『幼く小さく弱いいのちを慈しむ心』を育てるためには、どのようなことが必要なのだろうか。母性意識に関する実証的研究をつづけながら、様々なところで一緒に考えていきたいと思う。

## 謝辞

本研究の調査にご支援・協力をいただきました園田学園女子大学の湯舟貞子教授とネパール医科大学の Shiba Kumar Rai 教授、現地住民の通訳者と回答者の皆様に深く感謝申し上げます。

## 注

- 1 松村恵子「子育てにおける文化的背景と性役割—ネパール王国における乳幼児の子育てに関する経験と認知—」比較文化研究 No.85、pp.79-87、2009。
- 2 前掲1。
- 3 松尾精文 他訳『アンソニー・ギデンズ 社会学』両立書房（東京）、p.291、1998。
- 4 松村恵子『母性意識を考える』文芸社（東京）、pp.1-200、2005。
- 5 前掲4。
- 6 古谷野巨『実証研究の手引き』ワールドプランニング（東京）、pp.160-161、2007。
- 7 ルドルフ・シュタイナー著、浅田豊他訳『ゲーテ的世界観の認識論要綱』筑摩書房（東京）、p.119、1999。
- 8 前掲7。
- 9 結城史隆『第2節 社会構造と社会変容 ネパール pp.35-47』「アジア周縁諸国経済の現状と今後の課題」大蔵省 財政金融研究所編、平成12年6月。
- 10 前掲9。
- 11 菅野琴「ネパールにおける女子の基礎教育参加の課題—ジェンダーの視点から—」ジェンダー研究 第11号、pp.1-21、2008。
- 12 前掲3。

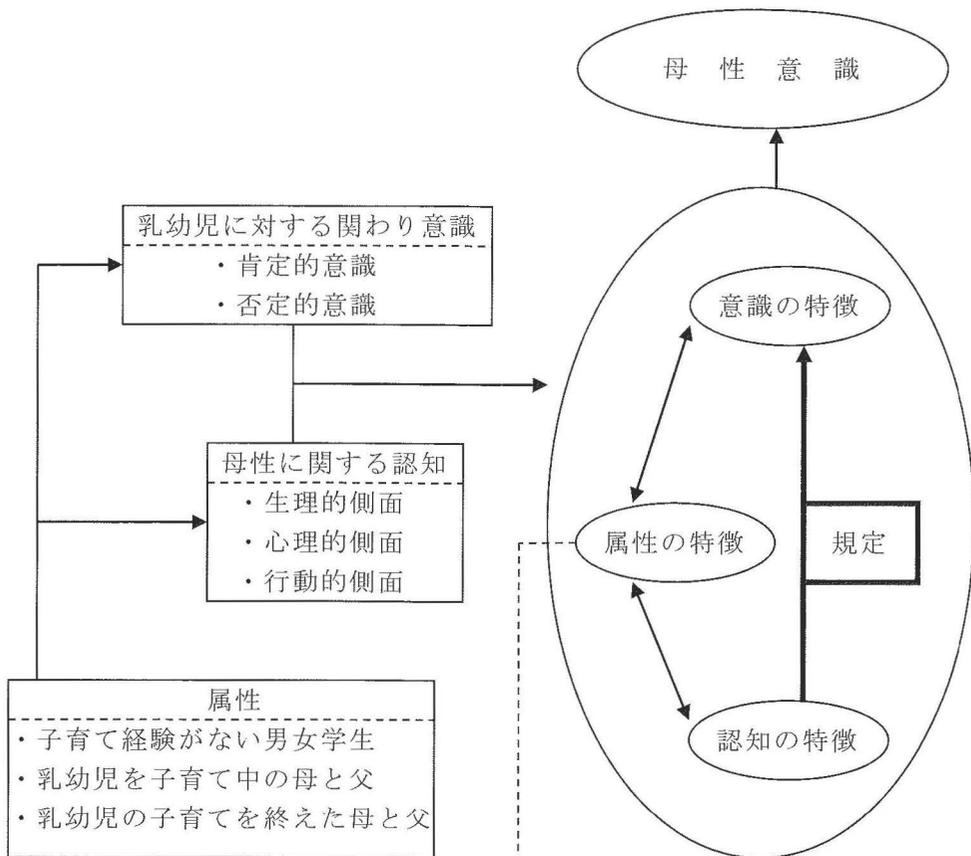


図1 母性意識に関する概念枠組み

(注 松村恵子『母性意識を考える』文芸社（東京）、2005）

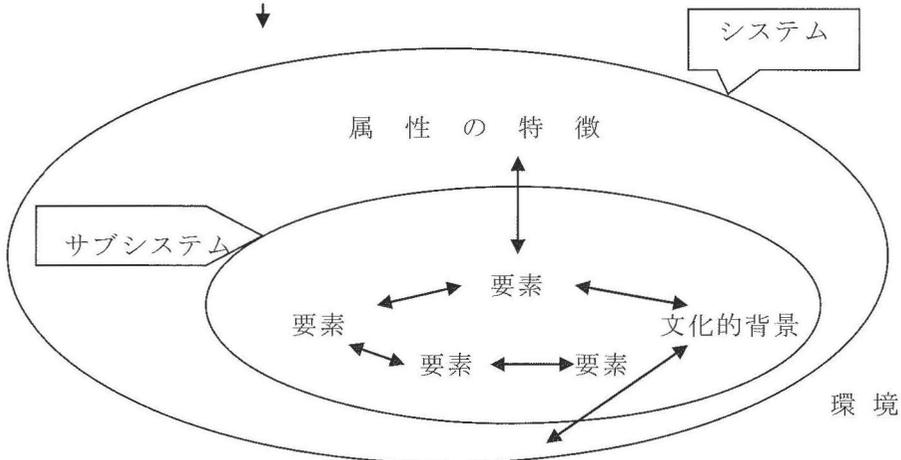


図2 属性の特徴となる構造を構成するシステムの複雑性

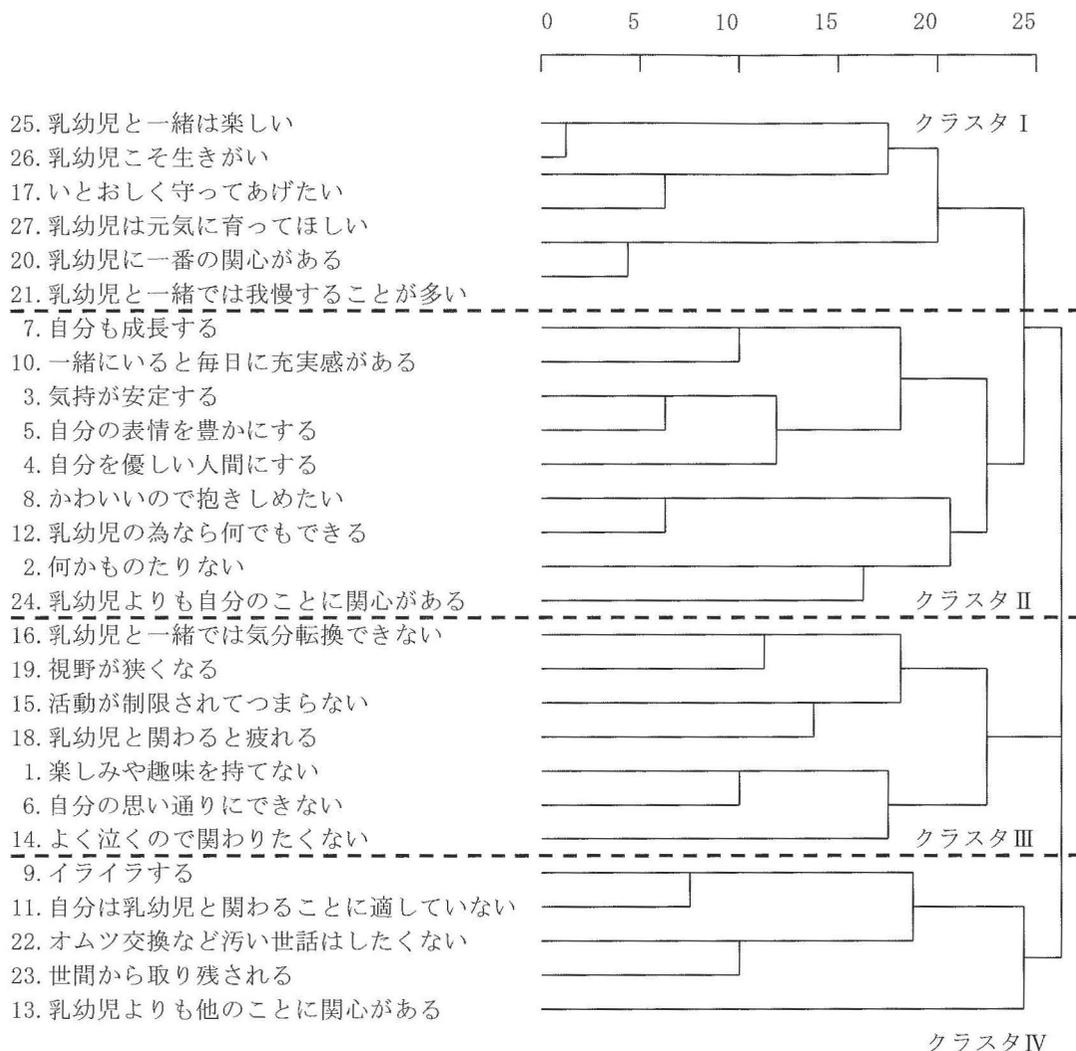


図3 階層構造—ネパールにおける乳幼児に対する関わり意識— (N=631)

表1 因子構造—ネパールにおける乳幼児に対する関わり意識— (N=631)

項目	因子負荷量					共通性	平均値	標準偏差
	I	II	III	IV	V			
《人間性成長》								
7. 自分も成長する	.751	-.172	-.023	-.015	-.085	.469	2.14	1.24
5. 自分の表情を豊かにする	.699	.044	.000	-.108	.014	.487	1.83	.92
3. 気持ちが安定する	.677	.059	.043	-.028	.109	.557	2.26	1.24
12. 乳幼児の為なら何でもできる	.600	.098	-.082	.060	-.094	.472	2.21	1.16
4. 自分を優しい人間にする	.542	.035	.396	-.237	.078	.501	2.13	1.23
8. かわいいので抱きしめたい	.495	.072	-.125	-.008	-.060	.525	1.89	1.21
10. 一緒にいると毎日に充実感がある	.429	.163	.071	.201	-.044	.434	2.19	1.37
2. 何かものたりない	.420	-.065	.233	-.054	.041	.279	2.67	1.44
《乳幼児至上》								
28. 乳幼児は元気に育ってほしい	-.048	.783	-.182	-.102	.089	.599	1.25	.61
20. 乳幼児に一番の関心がある	-.067	.694	.071	.133	.041	.510	1.80	.90
21. 乳幼児と一緒にでは我慢することが多い	-.096	.686	.292	-.180	.117	.573	1.84	.80
27. 乳幼児こそ生きがい	.107	.657	.000	-.008	-.202	.536	1.65	.89
25. 乳幼児と一緒に楽しい	.110	.642	.033	.096	-.011	.529	1.58	.75
17. いとおしく守ってあげたい	.284	.419	-.402	.244	.089	.613	1.66	.97
《育児焦燥》								
19. 視野が狭くなる	-.189	.204	.607	.175	-.440	.594	3.36	1.19
15. 活動が制限されてつまらない	.012	.007	.589	.073	.156	.409	2.75	1.25
16. 乳幼児と一緒にでは気分転換できない	-.150	.015	.578	.102	.037	.477	3.06	1.29
9. イライラする	.137	-.138	.528	.206	-.062	.373	3.45	.93
18. 乳幼児と関わると疲れる	.267	-.112	.346	.421	-.186	.487	2.45	1.23
《育児否定》								
23. 世間から取り残される	-.117	.010	.096	.767	-.080	.577	3.59	1.06
22. オムツ交換など汚い世話はしたくない	-.118	.194	.098	.597	.312	.576	3.36	1.02
24. 乳幼児よりも自分のことに関心がある	.072	-.148	.077	.564	.031	.489	3.35	1.10
11. 自分は乳幼児と関わることに適していない	.267	-.112	.346	.421	-.186	.518	3.40	1.11
《育児不満》								
1. 楽しみや趣味を持ってない	-.023	-.011	.096	.117	.703	.600	2.97	1.37
6. 自分の思い通りにできない	.074	-.077	.390	.074	.421	.528	2.82	1.20
13. 乳幼児よりも他のことに関心がある	.078	-.043	.074	.087	-.321	.132	3.58	8.77
14. よく泣くので関わりたくない	.612					.390	2.68	1.27
固有値	5.04	2.47	1.89	1.48	1.26			
寄与率	18.69	9.16	7.01	5.50	4.67			
累積寄与率	18.69	27.85	34.86	40.36	45.03			

(香川県立保健医療大学教授)